

令和4年度第3回社会教育委員会議日本民家園専門部会 議事録

- 1 開催日時 令和4年12月10日(土) 10:00～12:00
- 2 開催場所 日本民家園
- 3 出席者 委員 高橋部会長、大野副部会長、野尻委員、菅野委員、佐藤委員、
長谷川委員、柴田委員、松本委員
事務局 澁谷園長、東担当係長、葉山担当係長、真保職員
欠席者 入江委員、原田委員
- 4 議 題
園内視察(井岡家・佐々木家・作田家・沖永良部の高倉・太田家・北村家・伊藤家・
工藤家を視察)
- 5 傍聴者 0名
- 6 会議内容
 - (1) 園長挨拶
 - (2) 会議成立の確認、資料確認
 - (3) 園内視察
 - (4) 報告事項 (研究室にて事務局より説明)
 - ・次期指定管理に向けた作業の進捗状況について
 - ・入園料の値上げについて
 - ・日本民家園運営基本方針について
- 7 園内視察内容
 - 井岡家
 - (1) 井岡家のカマド葉山担当係長：井岡家は排水が悪く、雨の日は土間に水が入ってきてしまうことがある。そのため、カマドが下から水分を吸い上げ、表面剥離などの破損がつづいている。井岡家の耐震補強工事では、揚屋をして地盤を補強する予定だが、それにより外周りと内部の水みちを遮断できるので、カマドはその後に作り直す予定である。

野尻委員：井岡家のカマドに火を入れることはあるのか。時々しか火を入れないと空気中のものも含め、水分を吸ってしまう。水分を吸ったり吐いたりすることで傷むとも言われている。

葉山担当係長：火を焚くことはある。ただし、現在は剥離が進んでヒビが見られることと、下からの湿気を土が吸い込んでいる。そのため、火を焚くとカマド全体から湯気が出てしまう状態である。安全性を考慮して、火を焚くことを控えている。

園長：井岡家と鈴木家は民家園の中でも湿気が多い家である。鈴木家の裏に水が湧いているところがあり、家の下が水みちとなっている。井岡家の外側は屋内に比べ高くなっており、雨が降ると水が中に侵入してしまう。そのため、大雨が降ると警備担当が大きなスポンジを並べて、水を吸収してしている。今回の耐震補強工事ですこうした点も含めて改善していきたい。

大野副部長：今後カマドを作り直すのであれば、今のカマドは多少こわれてもよいと考えて、なるべく火を焚いたほうがいい。三澤家も昔は湿気が多かったが、火を焚くことにより緩和されたため、湿気が緩和されるか実験を試みるのもよい。

(2) 井岡家のバットレス（補強のための控壁）

菅野委員：家にあたる部分はあててあるだけか。

葉山担当係長：ズレないように、ボルトで固定する予定である。取り付け予定の柱も含め、井岡家は移築のときに取り替えられている柱がある。そういったものは、力の伝わりやすい貫通ボルトで固定するのもよいのではないかという意見があり、そうした。

高橋部長：基礎の打ちかえはどのあたりまでやるのか？

葉山担当係長：家の外側へ少し出たところまで行うので、立てる鉄骨はしっかり固定できる。

松本委員：景観が損なわれるようなことはないのか。

葉山担当係長：幅 15cm 程度の柱が立つため、違和感はあるが、補強が必要だから立てているという理解をいただければ、景観としては気になりにくいのではないかと考えている。

大野副部長：景観上問題にならないとは言えないが、大地震の際の倒壊を防ぐために必要な措置であるため、その旨の掲示を出していただくことになると思う。移築の際に新しい部材になっている箇所はボルトで直接的に支えようということだと思う。僅かに残っている当初の柱はできる限りさわらないようにしている。

葉山担当係長：バットレスを外に建てるようにした経緯を説明する。最初に耐震診断を行

った際には、釘やネジなどを打ち付けることで、壁を補強するという案が出たが、その場合、当初部材の大事な柱が損傷を多く受けてしまうため、採用しなかった。補強材を外に出し新しい部材に固定することで、当初部材はさわらないですむことがわかった。また、今後バットレスを更新する可能性もあるが、傷つけてしまった当初部材は元に戻すことができない。補強は可逆性（元に戻せる）が前提であるため、景観よりも、部材保存を優先した結果、屋外側にバットレスを設置する案となった。

松本委員：様々な史跡を見ると、補強の際に内側から補強するケースが多いと感じる。目立ちにくく、また元の形を尊重するということだと思うが、井岡家の場合はバットレスしか対策案はないのか。

葉山担当係長：民家それぞれで壁や柱の配置などが異なるため、全ての家で補強材を屋内に設置できるわけではない。宿場エリアの家は壁が不均等に並んでいるため、モデル化して構造解析をした結果、屋内に設置する場合、大量の補強材を入れられないといけないことがわかった。つまりそれだけ部材が傷つくということであるため、総合的にバランスを考え外に設置することで、屋内の損傷をへらすほうがよいということとなった。

●佐々木家

(3) 佐々木家周辺の排水工事

柴田委員：来園者が通る迂回路のコースは決まっているのか。

葉山担当係長：工事業者が提出する計画表をもとに決める予定である。現時点では、山下家の軒下部分を整備し、通っていただく案を考えている。

柴田委員：2022年春に佐々木家の裏側に設置された迂回路は、段差も多く、あまり使いやすいものではなかった。できるだけ段差の少ない迂回路を設置してほしい。

大野副部長：佐々木家の庭の排水はどのようになっているのか。

葉山担当係長：表面水は全体的に山下家側に流れるようになっている。屋根から落ちる水は、もともとあった排水溝に流れ、暗渠で外側に出している。

大野副部長：山下家側の地面のほうが高く感じるが、そちら側に流れているのか。

葉山担当係長：目の錯覚で高く見えるが、実際は山下家側に向かってなだらかに低くなっている。またわかりにくいですが、排水溝の中は見た目と逆勾配になっており、低く見える方から高く見える方に流れている。

大野副部長：舗装すると景観としてはあまりよくないが、バリアフリーと活動の場所という点からやむを得ないということだろう。

●山下家

(4) 山下家の茅葺屋根の状態

大野副部長：茅葺屋根に穴が開いている箇所があるが、早めに対処したほうが良い。

葉山担当係長：差茅をした箇所だが、そのすぐ脇に穴が開いてしまった。山下家は小屋組の耐震補強をまだしていないため、3年後位を目処に屋根の全葺き替えと耐震補強工事をセットで行う予定である。

野尻委員：前回の部会でも話したが、屋根で作業できる人を育成するなど、茅葺きの破損に臨機応変に対応できるような体制がつけるとよい。費用の面でも変わってくると思う。

●作田家

(5) 作田家の耐震補強工事

松本委員：家の中に鉄骨が入るということか。

葉山担当係長：そのとおりである。横方向に通る鉄骨もあるため、家の中側にはなるが、覗き込むと鉄骨が床下に見える部分が出てくる可能性がある。

柴田委員：作田家の特徴の一つとして、曲がりくねった梁があるが、工事後の梁の見え方は今と同じなのか。

葉山担当係長：梁は作田家の見どころであるため、近くに鉄骨やブレースが通ることがないように計画した。また、東日本大震災の際に柱からホゾが抜けてしまった部分もしっかりと組み込み、抜けにくいように施工する予定である。

大野副部長：梁のある空間の景観を優先し、鉄骨は座敷に立てる苦渋の選択をした。

園長：土間から見た風景を重視して設計した。

松本委員：鉄骨は何らかのカモフラージュをするのか。

葉山担当係長：焦げ茶色に塗装する予定である。

野尻委員：鉄骨の断面はどんな形か。

葉山担当係長：角丸の四角である。目立ちやすいH鋼を使うところもあるが、木で蓋をして、四角い断面に見えるようにする。ただし、補強材なのか、もともとある木の柱なのか判別がつくように施工したい。

園長：民家園では後から補強した箇所はできるだけわかるように残す考え方をとっている。

●沖永良部の高倉

(6) 高倉の屋根の葺き替え工事

高橋部長：葺き替えに使う茅はどんなものか。もともとの材料と同じなのか。

葉山担当係長：もともと使われていたのは山茅で、葺き替えも山茅で行う。御殿場から持ってくる予定である。

高橋部長：竹の下地ももとの材料と同じものか。

葉山担当係長：中の下地は竹ではなく、木の種類が判別しづらいような細い雑木を使っていた。枝が曲がっているようなものもある。腐っているものはとりかえるが、どうやって入手するか悩んでいる。

高橋 部 会 長：地元で何の木を使っているのかわかればいいと思う。

葉山担当係長：樹種を調べてはみるが、雑木は判別が難しい。似た種類の木を探していきたい。

大野副部会長：岩手などの竹のないところでは、雑木の細い幹を使っているが、沖永良部島はどうだろうか。下地を確認した方がいい。

葉山担当係長：下地は雑木で、横材は篠竹のような材を二本組で使っていた。押鉾は竹であった。

大野副部会長：葺き替え工事にはどこの職人が来るのか。

葉山担当係長：茨城県の職人である。

大野副部会長：工事の見学会は開催しないのか。

葉山担当係長：倉にはあがることができず、工事用のプレハブ小屋があるところも盛土してある区域のため、危険であり、開催はしない。

大野副部会長：解説パネルなどを出して、工事の様子を伝えていただきたい。

●太田家

(7) 太田家の耐震補強工事

柴 田 委 員：太田家は過去には焼損があったが、強度は問題ないのか。

葉山担当係長：焼損のひどい部材は取替えたうえで、焼損小屋に格納している。焦げた上でまだ使っている部材は強度を100%とは見ないで、80%、70%の状態で見積りを行った。そのうえで成り立つ強度を補強の計算に用いて、構造補強を行った。

大野副部会長：鉄骨などの補強材の部分が目立つが、金物を当初部材に直接当てず、当て木を当てて間接的におさえているからである。文化財における構造補強は阪神淡路大震災のあとに本格的に考えられるようになり、技術が日進月歩で進化している。もっといい方法が将来見つかった場合、もとに戻せるようにすることを重視している。そのためには、ある程度見た目を犠牲にしてもやむを得ない。補強材が、目立つところはパネルを貼って展示に使うという手もある。家の裏側にある補強材もムシロ掛けなどに用いればよい。軽いものならば問題無いと思われる。

葉山担当係長：茅葺きの家は、角が四角ではないが、水の排水溝は四角形に設置しないといけない。屋根から落ちる水を何とか受けられるよう、屋根の形に合わせて砂利の幅を広げるなどしている。

大野副部会長：屋根に合わせるとなると仕方がないと思う。

柴田委員：板戸に手の跡がついているように見える。

葉山担当係長：手の跡である。誰かが触るだけでどうしてもすぐついてしまう。

●伊藤家

(8) 伊藤家周辺の今後の整備方針

野尻委員：排水を整備すると、ドレンチャーなどの高さも変わるのか。

葉山担当係長：調整が必要になる。ここは作業用車が入ることはないため、太田家と同じような素材の土系舗装を行う。

菅野委員：今の犬走りの上あたりまで、地面が上がるのか。

葉山担当係長：犬走りと地面の段差はいまよりは少なくなるが、同じにまではならない予定である。

●工藤家

(9) 工藤家から奥門へつながっている園路

柴田委員：通路が一つ、通行止めになっているが、工藤家の排水状況と原因は同じなのか。工事と同時に補修して、使えるようになるのか。

園長：工藤家の工事とは別である。もともと土舗装をしていたが部分的に壊れ、坂道なのにガレ場のようにになって、転びやすいため、通行止めになっている。今後修理を行うが、時期の目処は立っていない。

大野副会長：通行止めであっても、荒れた感じを出さないため便所周りの草は刈っておいたほうがよい。

(10) 工藤家の整備方針

野尻委員：工藤家の外構について、どのような形で整備するかはまだ設計中か。

葉山担当係長：外周は葛石として玉石の小さいものを並べ、その外側にU字溝を置く予定である。

高橋部会長：犬走りには、途中まで石があるが、石のないところは腐った丸太杭を撤去してそのままの状態ということか。

葉山担当係長：おそらくそうである。

園長：必ずしも計画的に整備してきていないため状態が悪い。民家園は整備するところが多いが、予算や人手も少ない。来園者が安全に見学できるよう、また景観を保てるよう、少しずつ整備を進めていきたい。

●その他

(11) ボランティア「炉端の会」の活動について

大野副会長：団体向けのガイドも再開されたのか。

園 長：まだである。コロナ禍以前は2~3ヶ月先まで予約が入っていたが、コロナ禍では、3ヶ月後の感染状況がどうなっているのかわからないため、残念ながらガイドは中止している。その代わりに、火焚きは再開しており、定時ガイドも行っている。

大野副部長：一時は1日最大4棟ほど焚いていたと思うが、火を焚く家の数は戻っているのか。

園 長：その日に集まったボランティアの人数にもよるが、多いときには4棟ほど焚いている。

柴田委員：曜日班ごとにみると、活動状況にばらつきがあり、曜日班によっては棟数が少ないこともある。コロナ禍以前は床上公開の計画が作られていたが、今は有志の活動という形であり、自主的に参加した方がその日の参加人数によって焚く棟や数を決めている。コロナ禍が収束するまではやむを得ないと思う。

大野副部長：来園者から「火焚き、再開されたのですね」と声をかけられることはあるのか。

柴田委員：ある。囲炉裏から煙が出ている景色はいいね、などと言って下さる方もおり、それが炉端の会にとって活動を続けていく際の励みとなっている。

8 今後の予定

・令和5年3月 第4回専門部会 令和4年度事業評価について

以上について事務局より連絡。

<12:00 視察終了、閉会>